

〈翻 訳〉

エコノミクス  
第3巻第1号  
1998年8月

ザバヌー・ギッフオード著

『トマス・クラークソンと反奴隷制運動』(その3)

徳島 達朗

翻訳

Zerbanoo Gifford, *Thomas Clarkson and the Campaign Against Slavery*. 1996, Anti-Slavery International. London.

ザバヌー・ギッフオード著『トマス・クラークソンと反奴隷制運動』(1996年, 国際反奴隷制協会 ロンドン)(その3)

「設計図」

クラークソンは、いぜんとして旅行を続け、びっくりするような膨大な証拠を収集した。彼は単独でインタビューを実施しただけでなく、145の質問一覧を考案し、他の支援者がこれを用いてより多数の目撃者とインタビューできるようにした。ある時、クラークソンは窮屈なスペースにどのように奴隷を詰め込むかを示した、一枚の奴隷船の設計図を手に入れた。クラークソンはこの案を利用して、リヴァプール船籍の大きなブルックス号の図を描いた。それは船上に482人の奴隷を詰め込んでいた図であるが、奴隷船所有者はそのスペースに609人も詰め込もうとしたと記述した。それは1789年に刊行されたが、クラークソンの図の強烈なイメージは、「図版」として知られるようになり、今日まで知られているが、これまでに作られた宣伝物のうちで最も効果的なものであった。

最終的に、1789年4月に、枢密院委員会の奴隷貿易に関する850ページの報告書が発行された。どちらかを支持するというよりは、奴隷貿易賛成、反対両者の証言を単純に並べたものであった。下院での報告書に対する論議は四週間しか予定されていないので、クラークソンは、議会でウィルバーフォースが利用できるように報告を準備した。彼は内容を四つの部分に分け、それぞれ別の者が要約したので、ウィルバーフォースは論議に際して、この証言を使用できるようになっていた。クラークソン自身は、彼の専門とする船員の待遇とアフリカ貿易を執筆した。

5月12日、ウィルバーフォースは三時間半にわたって演説した。彼は議会でこのキャンペーンのリーダーとして広く認められるようになっていた。彼はピットの提案、即時廃止にかわる12の勧告を支持した。この妥協でさえ、さらなる調査を主張する奴隷貿易支持者には受け入れられなかった。廃止論者はもうこれ以上証人喚問を行わないと表明しているので、この新しい聴聞は短期に終了すると予測された。しかしながら、奴隷貿易側の代表者は、決定を翌年まで引き延ばすため、6月の議会会期後も、再度調査を行うという決定をした。

## 革命下のフランス

奴隷制支持の圧力団体の人々が利用する議論のひとつは、もしもイギリスが奴隷貿易を禁止すればフランスがそれを引き継ぐだろうというものであった。フランスはすでに大きな奴隷制に伴う利益を有していて、カリブ海のセント・ドミンゴ（現ハイチ）だけでも、アフリカからの奴隷の18%を輸入していて、合衆国への奴隷輸入の二倍近くであった。同島の土壌は良好で、イギリスのカリブ海最大の島、ジャマイカの5倍の生産性を有しており、フランス領西インド諸島は、イギリス植民地が500万ポンドの商品を輸出するのに対し、900万ポンドを輸出することが可能であった。その富はボルドー、ナント、ラロシェルの諸港に流入した。ちょうどロンドン、リヴァプール、ブリistolへ富が流入したように。

このような理由で、奴隷制に対するフランスの態度は奴隷制廃止運動にと

って決定的に重要にみえた。多数のフランス貴族の支持者たちは奴隷貿易反対のキャンペーンを開始し、『黒人の友協会』を発行しクラークソンの仕事を翻訳したりした。クラークソンは『協会』への支援を強化するために、1789年8月にフランスへ赴いたが、それは、新たに起こったフランス革命の際立った事件、1789年7月14日のバスティーユ襲撃の直後であった。ウィルバーフォースが国会議員としてフランスへ赴くことは危険すぎると考えられたので、クラークソンがイギリスの協会の代表として選ばれたのである。クラークソンはすでにイギリスにおいて幾千マイルも旅をしてきたので、フランスへでかけることを喜び、次のように語った。「運動の利益になることであり、反対ではない。私がどこへ出かけるかはたいした問題ではない。」

彼はカレーに到着したとき、同国がイギリスの報道が伝えるように無政府状態に陥っていないことに驚いた。しかしながら、旧フランス政府の政治が極貧と多数の乞食を生み出したのだと記している。「もしもあなたが馬車から降りるとすると、…あなたはすぐ襲われるだろう。路上においてさえ…多数の悲惨な状態の人々が、あなたの慈悲にすぎるだろう。」クラークソンはこうした光景を見て、イギリスにも貧困は広まっているけれども、なおイギリスの政治制度の優位さを享受していると感じた。彼がかつて面接聞き取り調査した船員の多くは、もし彼らが奴隷船に雇われることを拒めば餓死してしまうと嘆いていた。

クラークソンは執事であるけれども、多くの人々がフランスの沿道で、寺院の前でひざまずいている光景を見て困惑した。彼らは「迷信の枷」にからめ取られて、「奴隷状態」にあるように見受けられた。彼の望みは、昨今生じたフランスの事態が、「宗教の門戸が自由に開放される」日を導くだろうというものであった。

パリに到着した時、クラークソンは同市をはなれる前に（おそらく、セント・ドミンゴで奴隷によって栽培されたコーヒー豆から製造された）一杯のコーヒーを飲んだ。支配から解放された人々の幸福さは彼の目にはっきりと映った。バスティーユを通った時、それはなお取り壊しの最中であったが、クラークソンは彼の訪問の記念にひとかけらの石をくれるように要求したが、彼は囚人のメッセージが刻まれている牢獄の壁の石を選んだ。

フランス国民議会、フランスの国会は人権宣言を採択し、人は生まれながらに、自由であり、平等であると宣した。この平等を宣言する解放、奴隷貿易の終了の布告にもかかわらず、奴隷制度の廃止についてはまったく言及されず、イギリス同様にフランスでも議論の最中であった。『協会』のメンバーのひとり国民議会メンバー1,200名の内、わずか四分の一が奴隷制反対票に過ぎないだろうと計算していた。もしもイギリス議会のみが奴隷貿易を止めるとするならば、最初にそれに続くのはフランスであろうということは明白であった。不幸にしてこの状況はイギリスに反対に投影されていた。もしもフランスがすでに奴隷貿易を廃止していたならば、イギリスでは若干の議員のみが奴隷貿易反対票を投じただろう。

今日と同様に、植民地はフランス議会に直接代表権を有していた。クラークソンは滞在中にサント・ドミンゴ出身の「カラード」(混血) 6名の者と会った。彼らは奴隷ではなかったが、白人と同じ権利を持つてはいなかった。これらの人々はカラードの人々のために代表権を要求してパリに来ていたのであるが、白人奴隷所有者の圧力により彼らの叫びは無視されていた。こうした対応に絶望し、リーダーはもしも平和的な手段が失敗したならばと、クラークソンに次のように語った。「我々は自分の領地で本国同様の優秀な軍隊を作ることができる。我々の軍隊は我々に独立と尊厳をもたらすだろう、」と。クラークソンは忍耐するように忠告したが、もし彼らが正当に扱われなければ、生ずるであろうことは予測できた。「もしもプランターが彼らの策動について我慢したり、国民議会が引き延ばしたりすれば、サン・ドミンゴの火は燃え上がり容易には鎮火しないだろう。」 わずか三ヶ月後に、彼が会った男たちの一人が植民地で成功のおぼつかない反乱を指導し、無残にも処刑された。

社会秩序は末期を迎え、ルイ16世はいまだフランスの国王ではあるが権力はほとんど残っていなかったが、クラークソンの書物が一冊贈呈された。フランスがこのぞっとするような人間の積み荷輸送で莫大な利益をあげていたにもかかわらず、国王はその「凶版」を見て非常に驚いた模様である。

クラークソンは1790年2月にフランスを離れた。『協会』のリーダーの一人はクラークソンの別れの挨拶での両国の奴隷貿易の廃止の見通しを次のよう

に記している。「彼はその日が近いことを望んでいた。二大国が憎しみを消し去った時、永遠の平和の維持のために共に崇高な手段を取り連合するであろう。」 悲しいかな、クラークソンの見通しは実現しなかった。両国はまもなく戦争を行い、フランス革命の理想を支持するクラークソンは大衆に不人気であった。（\*へつづく）

## サント・ドミンゴ

サント・ドミンゴでの1789年の反乱は、この植民地の黒人たちがフランス革命の大いなる理想—「自由、平等、友愛」—を自分たちのために要求していたので、起こるべくして起こった沢山の反乱のひとつである。1780年代にサント・ドミンゴのカラード階級の権力と資本は増大しており、フランスと白人エリートによって拒否されている平等権を熱望した。この階級は増大し続け、彼らの革命のメッセージは奴隷たちにも影響を与えた。事実、サント・ドミンゴはエレガントな屋敷を建て、退廃的なライフ・スタイルで暮らしている白人のプランテーション所有者にとって、もっとも利益のあがる植民地であったが、奴隷の死亡率は最も高かったのである。

同島の黒人に反乱を最初に呼びかけたのは、ジャマイカからサント・ドミンゴへの逃亡奴隷であるブックマンであった。失うべき何物もなく、またアフリカでの自由な生活の記憶を持つ第一世代の奴隷たちは反乱の呼びかけに素早く呼応した。1791年に大きな奴隷反乱があった。何百というプランテーションが破壊され、二万人に及ぶ奴隷が逃亡し、ジャングルや丘の上で生活した。ブックマンはフランス人に捕らえられたが、奴隷たちは彼らの有名な指導者、トゥサン・ルーヴェルテュールを見つけたが、彼はアフリカの王の孫であったが戦争で捕虜となりポルトガルの奴隷商人に売られたのである。ルーヴェルテュールは家内奴隷として働いたが、本当に奴隷として服従したことはなく、次のように言った。「私は奴隷に生まれたが、天は私に自由人の魂を与えてくれた。」と。

イギリスとフランスの間の戦争が生じ、ルーヴェルテュールは1793年8月にチャンスをとらえ、正義の名の下にフランスに対する反乱を指導した。「私

は復讐を企てたのである。私は主権を握るために自由と平等を要求する。」イギリスは帝国の一部として同島の獲得と、さらに現存する領有地に反乱が広がるのを阻止しようという二つの目的で、同植民地に侵攻した。しかしながら、イギリス軍は元奴隷たちの果敢な抵抗に仰天し、さらに病人続出で一層弱化した。ルーヴェルテュールは、イギリスが平和裏に手を引けば、彼はジャマイカを攻撃しないという休戦交渉に成功した。イギリスとフランスとの闘争、さらには同島のさまざまなグループ間の闘争を経て、トゥサン・ルーヴェルテュールは同島を統一、新憲法を制定し自らハイチの統治者となった。

トゥサンは1800年から1802年まで経済、社会秩序の回復のために懸命になった。しかし、彼の成功は短命であった。ナポレオン・ボナパルトがフランスの指導者になると、彼は義理の兄弟と軍隊を同島の再奪取のために派遣した。今度はルーヴェルテュールは策略によって打ち負かされ、フランスに連行されたが、次のように宣言した。「私を打倒したことは、サント・ドミンゴにおいて自由の木の幹を切り倒したに過ぎない。だが、再び根から芽をふくことだろう。というのはその根は無数で根深いからである。」

彼の正しさは証明された。ルーヴェルテュールは1803年4月に、極寒のフランス・アルプスの獄舎で死亡したけれども、その後も、多数の反乱が起こり、彼が最初に統治した植民地は1804年に独立国ハイチとなり、この地域で最初の自由な国家となった。

不幸にして、これは植民地問題の終了ではなかった。内乱が続き、反乱の指導者の一人であった「ハイチ皇帝ジャック一世」、ジャン・ジャック・ディザリンが殺害された。同植民地は二つに分割された。軍部の指揮官、ヘンリー・クリストフがヘンリー王として北半を支配し、一方南部は競争者が共和国の大統領となった。

ヘンリー一世はすぐれた民主主義者ではないとしても、すぐれた支配者であることが証明された。彼はハイチ人とヨーロッパ人の平等を主張することを決心し、同島に君主、貴族制を創出した。ヨーロッパが長期にわたりアフリカ人奴隷の犠牲で享受したのと同等の華麗さと栄光が彼の目標であった。彼は旧プランテーションの館の煉瓦で、壮大な城を建造し、国家の富を貯え、大プランテーションを解体した。フランスが同国の前植民地の権利を主張し

続けており、他の諸国も新国家を承認しようとし、交易を拒否する国が多かったため、問題山積であることが明らかであった。コーヒーの輸出は半減し砂糖取引は完全に崩壊した。

1814年に、ヘンリーはウイルバーフォース、クラークソン両者に援助と助言を求める書簡を送った。ウイルバーフォースはハイチの人々のプロテスタントへの改宗の可能性に関心を示し、クラークソンは、「ハイチの人々の完全な平等の大衆的な承認の獲得について、純粋な高ぶり」と誠実さを示し、ヨーロッパにおける王の助言者となった。彼らは協力し学校とロイヤル・カレッジの建設と社会の改造の手段を講じた。1819年に、ヘンリーはクラークソンに対して、彼の正式のフランス大使になるよう要請したが、クラークソンはこの名誉を辞退しなければならなかった。それでも、クラークソンはフランス政府と両国間の状態について話し合いを続け、フランスが軍事力で植民地を占領しないということを確認させた。

1820年に、ヘンリーはひきつけのあと半身不随となった。彼の軍が彼を見捨てた時、彼は銃で自殺した。彼の息子たちは軍隊によって殺害されたが、彼の妻と二人の娘は、貧者に対する善行があったとして国外退去で一命を取りとめた。彼女らはクラークソンのもとで数ヶ月過ごし、イギリスでの永住の地を探した。ある晩、彼女らはウイルバーフォースの晩餐に招待された。ウイルバーフォースは友人に、「晩餐では前女王と三人の前プリンセスがテーブルに着きます」と、手紙で知らせた。

話をハイチにもどすと、内乱は続き二つの国は南部の指導権のもとで再統一された。ハイチの人々は両方の宮殿とプランテーションを見捨て、単純な農業生活に戻ったが、資源経営のまずさが一部エリートを除きすべての人を貧困に陥れた。悲しいことに、この状態は今日まで続いているのである。ハイチの奴隷たちは抑圧状態に抗して、偉大なる勇気と力を発揮し反乱を成功させたが、彼らは来るべき世代に平等と正義を確保することはできなかったのである。

(\*)クラークソンがフランスから戻った時、下院ではまだ奴隷貿易賛成の証人の聴聞が行われていた。議論の中心の一つは、正確なところアフリカで奴

隷はどのようにして手に入れるのかということであった。一時期、イギリス王立アフリカ会社(1663年にチャールズ二世により創立された)はイギリスの勢力圏からの奴隷の供給を独占していた。同社は海岸部に数箇所大きな城砦を設けたが、そのいくつかは今日も残っているが、そこでは奴隷たちが新世界へ船積みされ搬送されるまで地下に拘禁されていた。十八世紀にアフリカ人奴隷に対する需要が爆発的に増大し、私的会社(無認可の奴隷商人=徳島)が奴隷貿易を引き継いだ。彼らは比較的大きな利益を享受したが、それは永久的な居所を維持する費用を負担しなければならないとか、ヨーロッパ人に致命的と思われるアフリカのさまざまな病気による不慮の災難を忍ぶ必要がなかったからである。アフリカ西海岸の地形は港として使える場所はほとんどないので、奴隷船は海岸から離れて投錨し、それから人間の積み荷を集めるために小さなカヌーやボートを送り出すのである。もはや大量の奴隷を集めることが期待できない時は、船は海岸から離れたところで、何ヶ月かを過ごし、アメリカへ向けて航行する前にゆっくりと積み荷をいっぱいにするのである。

委員会で証言した奴隷商人たちは、奴隷はアフリカ人が経営するマーケットで買うのであると証言した。ある場合には、それは事実であったが、クラークソンはそれがすべてではないということを示したいと考えていた。彼はかつてカヌーに乗っていたイギリスの船員の話を知っており、クラークソンはこの男が証人として立って欲しいと望んでいた。問題はその船員について知っていることは、彼は現在海軍にいて奴隷船を改造した船に乗っているということだけであった。誰も彼の名前を知らないし、彼の階級やどの船に乗っているかさえもわからなかった。クラークソンの一途さと決意の典型例であるが、彼はこの男を探すために各地のロイヤル・ドックヤードへ三週間の旅に出た。デプトフォードを出発し、テムズ川に沿ってウールウィッチ、チャタム、シアーネスを経て、ポーツマスへと向かい、最後はプリマスであった。彼は317隻の船にインタビューのために乗船し、ついにその証人、アイザック・パーカーを見つけたのである。彼は攻撃された村を見たし、奴隷船の乗組員によって奴隷にされた人々を見たと言った。

委員会はいまや難しい選択に直面した。委員会としては審問を継続してい



るので、新法案成立の期限をもう一年延長するか、奴隷商人により持ち出されたいくつかの新しい論点には回答を与えないでおくかいずれかであった。ウイルバーフォースは前者を進言した。ふたたび奴隷貿易に味方する勢力は投票を避けるよう策動した。

奴隷制はイギリスにとって依然として大きな問題であったが、委員会への支持は前年より低下した。クラークソンもまた、奴隷制反対の証言を期待できる奴隷貿易体験者を探し出すことはますます困難になったと感じた。政府が奴隷制の問題について不統一であり、官吏の多くは自分の経歴に響くので、勝利がはっきりするまで、いずれかに傾倒することを公にすることを望まないという問題が存在した。もうひとつの問題はクラークソンに圧力をかけられて質問に答えた人々は、彼が答えた内容を覚えておかなければならないし、後日それを書かねばならないということであった。

クラークソンの旅はイングランド北部一帯七千マイルに及んだが、見つけられた新しい証人はわずか20人であった。彼は100人ぐらいを期待したので落胆したが、クラークソンはすでに議会に二千ページを超える証言を提出しているのである。

下院は1791年にかけて審問を継続した。委員会が全議員に証言の概要を配布した後、ウイルバーフォースは4月18日に奴隷貿易の廃止法案を提出した。論議は深夜に及び、翌朝3時30分に投票したが、法案は163対88で敗れた。勝利を希望していたけれども、委員会はこの後退に驚きはしなかった。議会の議席は富裕な者によって選出された者で占められていた。フランスの貧者が国家を転覆できるとすれば、イギリスの貧者がそうならないといえるのか、というわけでフランス革命はこのグループに恐怖を与えた。この年の3月に、トマス・ペインは『人間の権利』の第二部を刊行し、フランス革命を賞賛しイギリスの君主制を非難した。財産および自由の平等を要求したために、ペインはすぐに反逆罪に問われ、国外追放を強いられた。

クラークソンは奴隷貿易と奴隷所有者の関わりを記述した彼の証言概要は、「多くの者〔国会議員〕に『人間の権利』同様有害であると考えられている」ということを知った。それにもかかわらず、彼は廃止と革命の両者を支持し続けたが、彼はそれが「自由と幸福の偉大なる国」を創出したと信じていた。

彼は7月14日、バステューユ襲撃の二周年を記念して開かれた晩餐に出席した。悲嘆に暮れている友人たち、そのなかにはウイルバーフォースも含まれるが、ウイルバーフォースは、「彼(クラークソン=徳島)はこの運動にまったく邪念なしに参加したのだ。」と、指摘している。後年、二人がスタッフォードシャーで会った時のことを、クラークソンは記している。「ウイルバーフォース氏がまず私に言った言葉は、『おお、クラークソン、私はフランス革命からきっぱりと切り離すために、もっと君に会い、もっと君に話したかった。君もそうだろうと思うがね。』であった。」クラークソンは、強い不満をいっているその集まりでは沈黙を守ったが、彼には、彼のこの運動を支持する人々がもう一つについては支持しようとしないう理由がまったく理解できなかった。「私は奴隷制に敵対することとフラン人が自由を獲得したことを喜ぶ気持ちは完全に一致すると考えるのだが」と、友人に語った。

## シエラレオネ

クラークソンのいだいた強い信念のひとつは、イギリスはアフリカ人を奴隷化するのではなく、アフリカと正常な貿易を通じてもっと収益を得ることができるだろうというものであった。彼は調査を始めた当初から、広範囲なアフリカ製の品々を集めて、奴隷化されていないアフリカ人は野蛮、蒙昧とはまったく無縁であることを証明しようとした。

1787年にグランヴィル・シャープはアフリカへ帰りたく望む解放奴隷の避難所として、現在ではフリー・タウンとして知られる、フリーダム州を建設した。そこはセント・ジョージ湾に面した、世界で三番目に大きい天然の港で、交易のセンターを建設するには理想的な立地であった。最初の入植地は、1790年にアフリカの酋長と現地の奴隷商人の争いのために破壊されたけれども、シャープは同地での通商のためにイギリス人実業家の集団を組織していた。これらの人々が入植者を救済し、入植地の再建のために救援物資を送ったが、会社組織に発展せず十分な発展を見なかった。

シエラレオネ・カンパニーは1791年に議会から特許を与えられた。株主により選出された取締役にはクラークソンやウイルバーフォースが含まれてい

たが、なかには4月に奴隷貿易に賛成の投票をおこない恥ずかしい思いを抱き、以前奴隷であった人々を一生懸命救済しようとする国会議員たちもいたといわれる。廃止運動に同情的な銀行家や商人などの、創業時の株主の幾人かがその株を売却し始めた時、奴隷商人が事業を乗っ取るのではないかとの不安が生じた。こうした不安を食止め、ほかの実業家を引き付けるために、入植地の独立性を若干弱めて、シエラレオネよりむしろロンドンが経営にあたることにした。クラークソンは「いかなる国も商人に繁栄を与えるゆとりなどない」と断言した。何千というアフリカ人をシエラレオネへ移送するために弟のジョンが、カナダのノヴァ・スコチアへ派遣された。多くはアメリカ独立戦争の時にイギリス軍とともに戦った者で、戦争に敗れたあと、イギリスによってノヴァ・スコチアに送られた者たちであった。

ジョン・クラークソンはシエラレオネで、統治者として一年以上過ごしたが、常に進行状況を兄トマスに書き送っていた。彼が去る時のアフリカの自由なる人々へのメッセージは、彼らの未来に対する希望を、「私が皆の繁栄と、この大きな大陸の幸福をどれだけ願っているかは神のみがご存知である。」と、明らかにしている。それに対する返事は、あなたは帰国するが、私たちは「憧れの眼差しで会う」ことができることを望んでいるという内容であった。

シエラレオネ・カンパニーは奴隷貿易の終了とともに解散し、入植地はイギリスの支配下に入った。その成功のために、1814年にトマス・クラークソンは、「シエラレオネの黒人入植者および土着のアフリカ人の耕作と、その製品の販売を督励する団体」の議長となった。この組織はイギリスとシエラレオネの交易を樹立したが、これはイギリスとアフリカの公正なる貿易の最初の実例となった。1850年までに、五万人を超える解放奴隷がシエラレオネで生活するためにアフリカへもどった。そこは1961年に独立を勝ち取るまで、アフリカにおけるイギリスの最初の植民地となったのである。

## 戦争勃発

旅行はクラークソンの生活習慣となっていたので、彼は再度、イギリス国

内旅行に出発した。彼個人としては、「当時の[奴隷貿易に反対という]国内の熱意」を立証してきたわけだが、議会での敗北後、士気を向上するように援助することが大切であると自覚した。彼の運動に対する反対は依然として存在するが、国内の草の根レベルでは明らかに数において勝っていた。「あちこちで、利害関係を有する者たちはやっきになって、大衆の会合を妨げようとしたが、努力は実らなかった。」

今回の旅行で、クラークソンは西インド産の砂糖やラム酒のように奴隷によって生産された商品を買わないことで、奴隷貿易への反対を示すことができるのだという考えを広めることに心を配った。今日、このような行動は消費者ボイコットと呼ばれるが、こうしたやり方はアイルランドで地主の代理人に反対して抗議した、チャールズ・ボイコットにちなんで、そのように名づけられるようになる一世紀ほど前のことなのである。今日、我々はクラークソンが廃止運動を組織するにあたって、そのほかにもアイディアを用いて運動を大衆化する才能を発揮したことを確認できる。議会への大衆の請願運動が一つの例であり、奴隷船に詰め込まれた奴隷の「設計図」が二つ目、ボイコットが三つ目の例である。

1791年初頭、クラークソンはロンドンのウィリアム・フォックスが書いた、「イギリス人への挨拶」というボイコット(不買=徳島)運動を示唆するパンフレットを読み、すぐにリプリント版をつくり配布し始めた。この運動は奴隷所有者だけではなく、税収入の減少を通じて政府にも打撃を与えた。この運動はすぐに大衆的な支持を得たが、ある地域ではこのパンフレットを読んだあと、砂糖をやめた家族が五百をこえた。クラークソンは二家族がこのボイコット運動に参加する毎に、西インドへ運ばれる奴隷を一人減らすことになるかと計算している。若干の人々は甘味料を蜂蜜に切り替え、ある者は奴隷労働なしに生産される東インド産の砂糖を用い、またその他、楓シロップを採用した者もいた。クラークソンは次のように記して自慢している。「私が出かけて行ったところで、従前どおり砂糖を使用している町は皆無で…子どもでさえ…最も道徳的な決意で、甘さを…口にしない。」ロンドンのあるグローサー(食料雑貨商)は砂糖需要は三分の一まで落ち込んだと報告している。またバーミンガムのグローサーは砂糖の売上げがこの4ヶ月で半減したと述べ

ている。クラークソンは30万人もの人々が、何らかの形でこのボイコット運動に参加したと評価している。

不幸にして、砂糖のボイコット運動は、クラークソンが望んだ奴隷制への影響を有しなかったが、その理由の一つは、サント・ドミンゴの反乱が、同島の砂糖輸出に打撃を与えたので、砂糖価格が上昇し、需要の減退効果は消えたということである。もう一つの壁は、ボイコット運動は協会の完全な支持を得ていないことであった。ウイルバーフォースはこの考えを承認しなかった。クラークソンが個人的にボイコット運動を推進したが、その4年後の1795年になってやっと委員会は、奴隷生産物の「優先特権」は自由選択に道を譲るべきだと決定した。

請願運動の必要性については、さらに多くの取り決めが必要であった。クラークソンは最大のインパクトを達成するために、ウイルバーフォースが1792年4月に奴隷貿易の廃止のために行動を起こす前に請願が届くようにすべきであると提案した。討論が開始される直前までに、総計519件の請願書が殺到した。今回は、マンチェスターの請願は二万名の署名があり、グラスゴーおよびエディンバラの請願は総計二万二千の署名が提出された。反対に奴隷貿易支持者が行った請願はたったの4件で、そのうち1件は廃止ではなく奴隷貿易の改善を追加提案するものであった。

ウイルバーフォースは午後6時に演説を開始したが、論議は夜を徹して延々と続き、最後の演説、首相ピットの演説は翌朝6時に終了した。クラークソンは30人の支持者が議論を傍聴することを認めさせるために、下院の門衛に10ギニー（当時のちょっとした金額である10ポンド50シリング）をチップとして渡しておいた。彼自身は傍聴しなかったので、ウイルバーフォースが彼のことを、「この大きな運動のなかで果たしたその紳士の役割はいくら評価してもし過ぎることはない。」と賞賛したのを聞いていない。また彼は運動の反対者が彼のことを「巡回牧師」で「病人や貧乏人や旅人を脅迫して署名させた。」と、述べたことも聞いていない。

討論の最終段階で閣僚の一人は行動に熱意ある一言を追加する提案を行った。議会にイギリス奴隷貿易の廃止を付託するよりも、奴隷制度そのものを徐々に廃止することを決定する提案を行った。修正は当然なことだろうと、

彼は述べた。この議論には誰も満足しなかった。奴隷制賛成派の下院議員はたとえ彼らの老獪な手法で若干の年月延長が可能だとしても、奴隷貿易の終了を付託することには乗り気でなかった。廃止論者は不正なことであれば、漠然と引き延ばすのではなく即刻止めるべきであると論じた。下院議員のチャールズ・ジェームズ・フォックスは、「あなた方はどのようにしてほどほどの奴隷貿易というものを行うことができるのか。一つの国がほどほどに略奪され破壊されるということがありうるのか。われわれはこうした緩和なるものを正当化することはできない。問題はどのくらい引き延ばすのかという期間の問題である。」と、質問した。

議会の手続きとしては、このような修正法案が最初に採決されることになっている。この法案の通過は下院議員たちは徐々に廃止するか、あるいは何もしないかという選択に直面することを意味した。即時廃止に投票することを許容するよりは、よりよい選択に思えるので、奴隷貿易賛成の下院議員は修正案が通ることを保証した。廃止論の支持者はジレンマに陥った。皆無よりは若干まじったのか。もしも彼らが賛成票を投じ、その提案が通過したとすると、議会を説得して進行を速めることは極めて困難になり、奴隷貿易は何年も続くことになるだろう。もし彼らがこれは不十分として反対票を投じれば、彼らは本当は奴隷貿易の廃止はまったく望んでいないのだと責められるだろう。結局、投票結果は徐々に廃止が賛成230票、反対85票であった。その後、なお若干の議論があったが、廃止の期限は4年後、1796年と決定された。

議案が下院を通過すると、法律化の前にその議案は上院を通過しなければならない。政治上、上院は今日におけるよりも重要な位置にあった。現代では上院は議案を改正し、一年間下院の議決を遅らせることはできるが、結局上院は下院が可決した法律を阻止することはできない。当時の上院は平等なパートナーどころか、下院の可決した法案をその力を頼んでよろこんで拒否できたのである。奴隷制度問題が上院で議論するのは初めてであり、さらに奴隷貿易の調査が必要であった。再度の調査は会期を過ぎても継続され、議決はもう一年延期された。

もう一度、クラークソンは目撃者や証言を求めて調査にのりだした。前回

彼が抱えていた問題に加えて、奴隷貿易は継続しているとはいえ、将来奴隷制が廃止されるという不安を抱き奴隷船所有者ができるかぎり金を稼ごうとしているという事実があった。当時、イギリスでは奴隷貿易未経験の者も含め、奴隷貿易に従事する船舶数は通常の三倍であった。下院の議決はアフリカ人にとってよい方向ではなく、事態をいっそう悪化させた。

1792年末、フランス王家は革命政権により投獄され、ロシアとプロシアはフランスに宣戦布告した。フランスを動かしていた国民会議は国民公会にとって代わられた。最初の法令は他の人々とともに、クラークソンとウイルバーフォースにフランス市民権を与えることであった。トーリー党员として、ウイルバーフォースはこのことで幸せを感じることではなく、フランスを逃げ出した人々のための基金を集める会合に出席して旧体制への支持を示した。クラークソンはこの名誉を受け入れた。いま一度フランスを訪問することになるだろう、その時に「独裁と権力の廃虚のうえにすばらしい共和制が樹立される」のが見られるだろうと、友人に書き送った。

クラークソン自身は信念を持っていたが、フランス新政府にたいする世間の支持の程度は、とくに1793年1月のルイ16世の処刑以後、不人気であることは明らかであった。事実、二週間も経たないうちにフランスはイギリスに宣戦布告し、両国は以後二十二年間ほとんど戦争状態に突入するのであった。その対抗措置として、イギリスは外国人が同国に入るのを阻止するために外国人条例を制定した。(つづく)